

「小規模生産者」から東南アジアを照らす —経済社会の捉え直しへの挑戦—

第 21 期第 8 研究 林田 秀樹

当研究会は、「東南アジアの小規模生産者に関する部門横断的研究—地域経済・社会の内発的発展への貢献を考える—」という課題の下に研究活動を展開している。これは、今回の報告テーマが示している通り、東南アジアの小規模生産者（農民・漁民・中小零細企業）の生業・事業が果たしている社会経済的役割について人文・社会科学分野の学問領域の垣根を越えて研究することで、当該地域の社会経済そのものを捉え直そうとする試みである。これまで、東南アジア地域の経済社会が論じられる際、小規模生産者の存在と事業活動が議論の枠組みに入らないことが一般的であり、アグリビジネス論など個別の産業分析や文化人類学／農村社会学において専門的アプローチが行われているのみであった。これでは、東南アジアの経済社会をトータルに理解することにならないのではないかと。これが、当研究会で共有されている問題意識であり、これに基づいて、これまでの2年間、経済学、東南アジア地域研究、人文地理学等様々な専門分野をもつメンバーが各分野で重ねてきた研究を報告し合い、研究課題にある通り「部門横断的」な議論を重ねてきた。このことからわかる通り、当研究会での共同研究は自ずと学際性を帯びている。そして、その学際性を単なるプロジェクトの特徴の一つとせず、研究目的を達成するための用具とするために、各メンバーが年に1度は研究報告を行うことを研究会の運営方針としている。

以上のような次第で、2022-23 年度に開催した研究会は 19 回を数え、報告者数はゲストを含めて延べ 28 名に上った。このうち、2023 年 7 月の回は、「東南アジアの山の民・海の民・街の民—小規模生産者がつくる経済と社会—」という統一テーマの下に、人文科学研究所第 107 回公開講演会を兼ねて実施し、その記録を「人文研ブックレット No.81」にまとめた。今後は、月例研究会の開催と並んで、今期（21 期）の研究成果のまとめとして予定している『社会科学』誌上での特集の企画・執筆と、来期も研究会を発展的に継続していくかどうか、継続するとすればどのような課題を設定するかについての検討が、研究会運営の焦点となる。その課題の1つの柱となるのは、「小規模生産者、特に農林水産業従事者が、なぜ地方部にとどまり続けるか」について、社会的な要因ではなく経済的要因に着目して解明していくことであると考えている。他分野の成果も援用しながら、経済学的なフレームで上記の課題を解明したうえで、東南アジア地域並びに同地域に位置する各国の経済のあり方と動態をホリスティックに説明できるような研究を組織的に進めていきたい。